

国際空港都市として歩み始める

昭和53年5月20日、成田空港が開港。市外から空港へのアクセスを向上させる東関東自動車道が開通したほか、公設地方卸売市場、国際文化会館といった生活で大切な役割を担う施設が整備されていきました。



①フランクフルトから到着した旅客便一番機②開港を待つ成田空港(昭和53年)③完成間近の旅客ターミナルビル(昭和47年頃)④開通前の成田インターチェンジ(昭和47年)⑤新鮮な青果物や水産物が流通する公設地方卸売市場⑥国際文化会館のこけら落としで演じられた「寿三番」

厳戒態勢の中いよいよ開港

昭和47～48年の空港施設第1期工事によって主要施設がほぼ完成すると、航空機の騒音による周辺住民への影響という問題がクローズアップされていきました。市では、騒音対策を最優先事項として民家防音工事の助成などを進めると同時に、空港対策室を発足し、空港に関する問題に対処しました。

昭和53年3月26日、3月30日に予定されていた開港が目前に迫る中、空港の中核施設である管制塔が破壊される事件が起こります。この影響で開港を延期せざるを得ない状況となりました。

そして、施設の復旧が整い、新たに開港日として決定された5月20日、1万人を超える機動隊・警察官に見守られる厳戒態勢の中で、開港を迎えました。

運航開始日となった翌21日午前8時3分、米国・ロサンゼルスからの貨物便一番機が4,000メートル滑走路南側に着陸。着陸を見守っていた関係者からは拍手と歓声が沸き

起こりました。

東関東自動車道が開通し東京まで直結される

昭和46年10月に富里村(現富里市)まで開通していた東関東自動車道。昭和47年8月には、成田インターチェンジの供用が開始され、成田市と東京都が高速道路で直結されました。

昭和60年2月には、大栄インターチェンジの供用が開始され、大栄町まで延伸。さらに昭和61年には大栄～佐原香取間が開通し、道路交通網が整備されていきました。

公設地方卸売市場が地域の流通拠点に

昭和40年代、成田空港や成田ニュータウンなどの建設、空港関連企業の進出により急激に都市化が進展しました。それに伴う人口増加による作物に対する需要と、成田市域で収穫できる野菜などの供給を結ぶ流通拠点として市場の建設が急がれました。

そして、昭和49年6月。公設地方卸売市場青果部が飯仲

に開設されました。みずみずしい野菜や果物が並ぶ場内で威勢の良い競りの声が飛び交いました。昭和50年6月には魚介類を扱う水産市場を併設。地域に新鮮な食を提供する役割を担っていきました。

待望の国際文化会館が完成

当時、成田市内には市民の大規模集会や行事を開催できる市立の文化施設がなく、市民から要望の声が多く寄せられていました。

そこで、日本の空の表玄関にふさわしい市民文化の殿堂とすべく、空港開港に先駆け昭和48年10月に国際文化会館の建設が始まりました。当時の広報なりた(昭和48年11月1日)では「長年の市民の夢実る」と待望された施設の概要などを紹介しています。

昭和50年3月に完成すると、記念行事は市制施行20周年記念式典を兼ね、12日間にわたって開催されました。こけら落としの歌舞伎やテレビの公開番組などが開催され、連日大にぎわいで完成を祝いました。

昭和47年～54年の出来事

昭和47年	8月	東関東自動車道の成田インターチェンジが供用開始
昭和48年	5月	中台運動公園野球場(現重兵衛スポーツフィールド中台野球場)が完成
	10月	若潮国体が開催される
昭和49年	6月	公設地方卸売市場青果部を開設
	6月	下総町で町章を制定
昭和50年	3月	国際文化会館が完成
昭和53年	5月	成田空港が開港
	2月	常総大橋が開通
	3月	中央公民館が完成
昭和54年	4月	国鉄(現JR)成田駅橋上駅舎が完成

若潮国体で軟式野球の会場に

スポーツの普及や地方文化の発展などのため、毎年、都道府県持ち回りで開催される国民体育大会(現国民スポーツ大会)。昭和48年10月には、若潮国体として千葉県で開催されました。

軟式野球の会場となった成田市では、昭和46年8月に完成した大谷津運動公園野球場をメイン会場に、昭和48年5月に完成した中台運動公園野球場(現重兵衛スポーツフィールド中台野球場)などをサブ会場として、熱戦が繰り広げられました。



オリンピックの聖火にあたる炬火が下総町を通過